



○ 本日より分散登校から短縮通常授業となります！

夏休み明けは小中高生の自殺が多い傾向にあります。生徒の命を救うために、私たち教員は何ができるのか。わが子を自殺で失った遺族らでつくる一般社団法人「ここから未来」は、オンラインでシンポジウムを開き、「子どもの『大丈夫』はSOSかもしれない」と警鐘を鳴らしたそうです。

「教室で生徒たちが『大丈夫』と言ったとき、大丈夫ではないことが大半を占める。大丈夫ではない可能性が高い、ということを大人が知る必要がある」シンポジウムに登壇した元川崎市立小学校教諭で学級経営コンサルタントの渡邊信二さんは強調しています。

2010年6月7日、川崎市立南管中学3年だった篠原真矢さん＝当時（14）＝が自宅で自ら命を絶ち、市教育委員会の指導主事だった渡邊さんが調査を担当し、同級生たちへの聞き取りから、真矢さんは周囲が声を掛けた時に、「大丈夫、大丈夫」と2回繰り返していたことがわかったそうです。母真紀さんは「大丈夫って自分に言い聞かせるように繰り返したのだと思う。何も心当たりがなければ『何のこと？』と言うことが大切で、『大丈夫』は何か心当たりがある証拠だ」と話しています。

調査では、真矢さんが友人に対する同級生のいじめを止めようとしたが止められず、自らもいじめられるようになったことや、自身が描く理想と現実の乖離に苦しみ、次第に追い込まれていったことが明らかになりました。父宏明さんは「大人は、子どもの『大丈夫』という答えを想定して聞いていないか。大人自身の安心材料にしていないだろうか」と問い掛けています。

真矢さんを心配した生徒が学校側に様子を伝え、先生が真矢さんに一度声を掛けたが、それ以降、先生たちが頻繁に声をかけたり、様子を気に掛けたりすることはなかったそうです。

悩んだり、苦しんだりしている生徒がいたとき、教室では「自分事として考えよう」「当事者意識を持とう」と言われることが多いです。しかし、真

や 矢さんの死し後ご、小しょう学がっこう校きょうだんの教壇もどにわたなべ戻もどった渡邊わたなべさんはそのよような呼よび掛かけをやめ  
たとのことわたなべです。渡邊わたなべさんは「本ほん当とうに苦くるしんほんでほんいる本人にんの気き持もちにななれるか  
とふいかのうちかにいっぽうと、一い方ぽうで「本ほん人にんの気き持もちをそうぞう想そう像ぞうしてきみるもことはとでき  
る」と強きょう調ちようしてきいます。「つらいだらうな」と想そう像ぞうし、そういう気き持もちを友  
だちと共きょう有ゆうするこことこだけこで「苦くるしんこでこいる子こを孤こ立りさせこない」といくう空くう気きが  
教きょう室しつにう生うまれきょうてしつくるうのうだうそうです。「傍ぼう観かん者しゃだじゅんからだじゅんめじゅんだ、ではなく、準じゅん当とう事じ者  
とくして苦くるしんこでこいる子こと一いっしょにあゆあんでいこうと。そういうメきッきセきーしつジしつを教きょう室  
で、家か庭ていで、大お人とちながはっしんしてかたたいています。

じぶん かか こんなん かく せいと  
自分が抱かかえている困こん難なんを隠かくしている生せい徒とがいます

もんたいこうどう おお ばあい せいと かか こんなん  
問もん題たい行こう動どうは多おくおの場ば合あい、生せい徒とが抱かかえている困こん難なんが  
影えい響きやうしています

いしき せいと たいおう  
それを意い識しして生せい徒とに對たい応おうしましよう

せんせいがた えがお すく せいと  
先せん生せい方がの笑え顔がで救すわれる生せい徒とがいます！！！！